農業後継者育成基金事業

令和5年度農業後継者特別支援事業

事業主体名　鹿児島県立農業大学校　野菜科

1　目的

農大野菜科では令和3年度にかんしょでJGAP認証を取得し，学生教育の一環として「安心・安全」かつ「持続可能な生産」に取り組んでいる。2年目に入り，JGAP基準を遵守することで現場や栽培過程における課題が明確になり，生産から販売における問題点は改善されつつある

しかしながら，現時点ではJGAP認証を取得するためのコストはかかっているものの，経営的に改善された効果は明らかではない。この理由としては，いくつか考えられるが，大きく①生産工程管理を整理したものの改善や効率化に生かされていない②認証農場表示や認証マークを使用しておらず有利販売をしていないことの2点がある。

そこで本事業を活用しJGAP認証の更新に向け生産工程を再度の見直しし，特に経営改善を視点に入れた取り組みを図ることと，認証マークの使用を開始し積極的に宣伝を行うことで，農大ブランドの信頼感の向上をはかり，農大農産物の知名度向上や認証制度等を活用した経営改善や有利販売について学習する機会とする。

2　実施状況

(1)JGAP認証の継続取得へ向けた取り組み

かんしょ定植から本格的に記帳やほ場及び倉庫等の整備を開始した。7月11日～13日にかけて山口大学の陳内准教授及び(合)つちかい代表大神氏よりGAP概論の講義を受講し，GAPについての考え方や知財を切り口にした農業の可能性等について学んだ。

10月に現地審査を受け，果樹科のパッションフルーツとともに認証を取得。野菜科のかんしょについては近くの農政普及課や県担当者等の立ち会いのもと公開で記録やほ場，収穫物保管所等の審査を受けた。

ほ場での作業について，農薬の使用記録等の記録は始めてみると散布記録の可視化や情報共有が容易であり，他の品目でも実施するようになった。また，ほ場周りの安全管理など認証対象品目のかんしょだけでは無く他の作物についても同様の視点を持ち生産の現場や環境を見直す場面が見られるなど教育的効果が大きかった。

(2)認証マークを使用した有利販売の検討

12月3日の農大祭より販売を開始し，校内販売会等の直接販売できる機会に認証マークを提示し販売をしている。特に対面販売時に出荷を心がけたこともあり，GAP認証マークを掲示すると，購買者からの多くの問い合わせがでた。認証ほ場のかんしょ販売開始時に認証外ほ場のかんしょより1割程度値上げしても順調に販売が進み，差別化できることが体感できた。宣伝の効果は大きく有利販売が可能であった。

3　今後の課題，取り組み

学生の人数が多くGAP制度の内容，記帳や整理整頓等日頃の作業についての理解度がまちまちであり，今後も継続して取り組みを周知徹底する必要を感じた。

有利販売については，消費者からの興味関心が高く，十分に差別化できる手応えがあった。しかしながらJGAPそのものの知名度が低くきちんと説明できる人間が対面に居なければならなかった。